

【作物】

1 品種・田植期別の穂肥施用時期 (出穂期・成熟期は目安)

Table with 6 columns: 品種名, 田植期, 穂肥(出穂20日前) 化成444又はNK特11号, 施用量(10a), 出穂期, 成熟期. Rows include きぬむすめ, ヒノヒカリ, にこまる, 松山三井.

・その他: 「あきみのりV550号」を使う場合は、出穂25日前に30kg/10a施用(穂肥がゆっくり効く)。

2 水管理について

- (1) 中干し直後: 2~3回走り水を行った後に、間断灌水を行います。
(2) 幼穂形成期(出穂25日前)~穂ばらみ期: 土壌水分が不足すると収量や品質が低下するので、水分を十分保ちます。
(3) 出穂期~出穂期以降: 浅水管理(2~3cm)をします。異常高温が続く場合は、かけ流し灌水で地温を下げ、根傷みを防ぎます。
(4) 登熟期: 灌水して土壌に水分を与えたら、水は溜めずに、足跡に水がたまっている程度(飽水状態)にします。
(5) 落水期: 落水期は収穫前7日程度としますが、収穫作業に支障のない程度に刈り取り直前まで走り水灌水で土壌水分を保ちます。

3 病害虫防除について

Table with 3 columns: 防除時期, 病害虫名, 農薬名 濃度・使用量 使用時期. Rows for 8月中~下旬 and 8月下旬~(穂揃期~傾穂期).

・その他: コブノメイガが多発した場合は、パダンSG水溶剤1,500倍(収穫21日前まで)で防除して下さい。

また、稲こうじ病は、前年度多発した圃場では菌密度が高いため再発の可能性があります。出穂20~15日前にドイツボルドーA2,000倍(出穂10日前まで)を予防散布して下さい。他剤との混用はできません。

・カメムシ対策: 出穂2週間位前までに、畦畔・休耕田の草刈りを行って下さい。乳熟期から糊熟期が最も被害が大きく、この時期に当たる出穂10~15日後に防除を実施して下さい。 <松本>

【野菜】

1 さといも

(1) 病害虫防除

ア 疫病

8月は、芋の肥大、孫芋の着生、その後成熟期を迎えるため感染しやすく、台風の襲来による長時間の降雨により発生が拡大します。ジーファイン水和剤を、雨前に定期散布して、予防に努めて下さい。発生を確認したら、発病葉を除去して、アミスター20フロアブルを散布して下さい。さといもは散布薬剤が付着しにくいので、まくびか10,000倍を加用して下さい。また、葉害を軽減するため、土壌水分や生育状況を観察し、灌水後夕方防除して下さい。

Table with 5 columns: 薬剤名, 病害名, 濃度, 使用時期/回数, 特徴. Rows for ジーファイン水和剤 and アミスター20フロアブル.

イ ハダニ類

梅雨明け後、増加する傾向であります。発生初期にコテツフロアブル2,000倍(収穫7日前/2回)で防除して下さい。

ウ ハスモンヨトウ

8月は多発するため、発生初期の集団でいる若齢幼虫の時期に防除して下さい。薬剤はプレバゾンフロアブル5 2,000倍(収穫前日/3回)、またはマトリックスフロアブル 2,000倍(収穫7日前/3回)で防除して下さい。

(2) 水管理と追肥

ア 全期マルチ栽培は、晴天が続く場合畝間の土の状態や生育状況をよく観察して灌水して下さい。

イ 日中、溝に水が溜まったままの状態では、水の温度が上がり根傷みの原因となりますので、夕方の灌水に努め、日中には停滞水が残らないよう注意して下さい。

ウ おおなか作業を行った化成体系のさといもは、おおなか1ヶ月後を目安にして「化成444」を40kg/10a施用して下さい。

2 やまのいも

(1) 水管理と追肥

8月上旬に、MB粒状固形を80kg/10a施用します。最終追肥が遅れると、芋の形状の乱れが心配されるので注意して下さい。開花後、栄養生長から生殖生長に移行し、吸肥力も8月上旬~9月にかけて最大となり、この時期に土壌水分を最も必要としますので、定期的な灌水により適湿を保つようにします。

(2) 病害虫防除

Table with 4 columns: 病害虫名, 使用薬剤, 散布濃度・量, 使用時期/使用回数. Rows for ハダニ類, ナガイモコガ, シロイチモジヨトウ, 炭そ病.

<山口>

【果樹】

1 摘果

着果量に応じた摘果を行い、目標とする大きさの高品質な果実の生産と来年の着花確保を図ります。

(1) 温州みかん

着果量が多く樹勢低下が心配される樹は、先月に全摘果を行った樹冠上部以外の着果部の摘果を始めて下さい。

着果と新梢発生バランスがよい樹は、9月以降に重点を置いた後期摘果を行い、着果ストレスによる果実品質の向上に努めます。樹冠上部を摘果して夏芽を発生させた樹は、ミカンハモグリガ(エカキムシ)の防除を徹底して、健全な結果母枝を確保します。

(2) 中晩柑類

着果量の多い樹は、早急に摘果を行い樹勢維持と果実肥大の促進に努めて下さい。仕上げ摘果は、8月上旬頃までに完了して下さい。

2 灌水

土壌の過乾燥は、果実の生育阻害(小玉果、酸高果実)や樹勢低下を助長するので、適切に灌水を行います。

温州みかんは、葉の巻き具合(葉の萎凋が朝になっても戻らない)、旧葉の落葉状況等をみながら、7日間隔で10~20mm(10~20t/10a)を目安に灌水して、適度な水分ストレスを維持します。

中晩柑類は、高温、土壌乾燥が続けば7日間隔で20~30mm(20~30t/10a)を目安に灌水を行って下さい。

特に、甘平は、梅雨明け後から8月までの間に土壌乾燥が進むと、その後の降雨で裂果が多発する傾向があるので、注意が必要です。

3 病害虫防除

黒点病防除は、前回散布後の累積降水量200~250mm、又は30日の間隔で定期的に薬剤散布して下さい。本病に弱い品種(せとか、清見等)は、散布間隔を短くします。また、伝染源となる枯れ枝は除去して下さい。

そのほか、ダニ類、カミキリムシなどの防除をします。

<守屋>

【花き・花木】

1 シキミ

(1) 病害虫防除

高温期に多発する害虫は発生初期に防除を実施し、お彼岸出荷に備えて下さい。ダニにはコテツフロアブル2,000倍、アブラムシ・ハマキムシにはスプラサイド乳剤1,500倍、病害対策にはトップジンM水和剤1,000倍を散布して下さい。

(2) 下枝の整理

株元の古枝や細い下枝が込み合ってくると、病害が蔓延したり防除作業がやりにくくなったりします。また、収穫枝の伸張が悪くなるので、適宜切除して風通しを良くして下さい。

(3) 荷造り

採取した切り枝は、病害葉や古葉、実などを取り除きます。出荷先の規格に合わせて、輪ゴムや紐で元を揃えて束ね、日陰で10時間以上、水揚げをして下さい。

2 シンテツポウユリ

(1) 灌水

この時期の極端な乾燥は、品質低下の要因(葉先焼け・草丈不足)となり、価格に大きく影響しますので、十分な灌水を行います。収穫期に入り、高温・干ばつが続く時は、日中に葉水を与えます。

(2) 追肥

葉色を保ち光沢を出すため、出蕾後は福瀬太陽液肥(600倍、農薬混用可)を収穫始めに1回散布し、8月上旬に2回目を散布して下さい。

(3) 強風対策

フラワーネットの支柱補強をするのと同時に、ユリの生育に応じて上げ、ユリをネットの枠内に入れ、倒伏を防止します。風で曲がった茎は半日以内であれば修正が可能なので、まっすぐに直します。

(4) 病害防除

葉枯れ病が多くなります。収穫期でも汚れの少ないフルピカフロアブル2,000倍を散布して下さい。

<安藤>

【畜産】

(ハエ)の防除対策を実施しましょう

ハエの発生は6~7月をピークに8月は若干減少し、秋口に再び増加します。ハエが大発生すると、近隣住民からの苦情につながるばかりでなく、家畜にとっては病気の伝播やストレスによる生産性の低下にもつながります。ハエは多数の卵を産んで急速に増加するため、成虫を駆除しても効果が低いので、初期の発生を減らすことと、幼虫への対策を続けることが重要です。

●幼虫の防除

ハエが産卵するのは栄養と水がある場所で、放置された残飼や糞尿、床の隅、バンクリナー、餌槽の裏、流れが悪い側溝などの掃除が面倒な場所が多く、入念に掃除する必要があります。除去した残飼や糞尿はすみやかに堆肥化して下さい。また、掃除がむずかしい場所にはIGR殺虫剤(幼虫の脱皮や羽化を止める薬剤)等を使用します。

●成虫の防除

一般的には粘着シートの使用や、誘引殺虫剤を壁などに塗る方法や毒餌法が使われています。同系統の殺虫剤の連続使用は、耐性ができやすくなるばかりでなく、ハエを畜舎の外に追い出して周辺に散らしてしまうことにもつながります。殺虫剤の使用は緊急的な対処法と考えてください。

<住吉>